



# Naked Lovers



Ginger

## ダブルモノローグ

私が彼に初めて逢ったのは、4月。3度目の土曜日。新緑と雨の匂いを含んだ風が優しく頬を包む。あやまちを犯すなら今だ、とそそのかすように。

私は犯すべきあやまちも思いつかぬまま、気まぐれな季節の春の香りを味わうために、ストリートに面したテラスに座った。明るいうちからの、ショートドリンクス。その飲み物の名前「XYZ」は、終わりを意味していた。そう、私は人生に何も期待していない。幸福になるという欲望は、すっかり無くしていた。ささやかな喜びといえば、季節の気配を誰より敏感に感じて、お酒と一緒に楽しむこと。それだけ……。こうして時間をやり過ごすことで、あまりにも贅沢で不毛な人生の浪費を重ねている。それでよい、充分だと思っていた。

その日、こんな風に唯一の快楽を彷徨っている時、それを邪魔する人間が現れた。私を見つめている、無邪気な欲望を持った、男の視線。しかも、天気の話だなんて。彼も、日の落ちる前からのマティーニ。古風な男を感じさせる趣味だけど、見ず知らずの女性に話しかける最低限の「エクスキューズ ミー、レイディ」その言葉さえ知らないなんて、無邪気にもほどがある。

私は、唯一の楽しみから引き戻されたことに、とても腹を立てていた。

無防備な女に見えた。外見は見事に隙のない……。ハイヒールから繋がる美しいふくらはぎの曲線、艶のある髪、微かな微笑みを刻む唇のルージュ、ナチュラルな爪……。だからこそ似合う、強い酒。そんな女がとても無防備に見えたのは、まるで雌ライオンがアフリカの大草原で日光浴を楽しんでいるように、自然に堂々としていたからだ。彼女を眺めていたら、俺もなんだか気分が良くなって、雄ライオンが鼻をすり寄せるように口走ってしまったんだ。

「やあ、いい天気だね！」

彼女は視線だけ動かして俺を一瞥すると、見事に無視をした。まるで何事もなかったように、ライオンの日光浴を続行した。不思議と腹は立たなかった。軽く口笛でも吹きたくなるくらい、徹底していたからだ。俺は、街で気になる女に出会った時、ためらいなく声を掛けるようなレディスマンではないけれど、彼女とは少し、話してみたい気がした。どうにも同じ匂いを感じてしまったからなのかもしれない……。

だから、ひと月後の週末のマルシェで彼女を見つけた時の嬉しさは、まるでティーンエイジャーのようだった。

彼女はスッピンで、果物や野菜を買っていた。「おまけ」されて笑ったりして。俺は、並びの店で野の花の小さなブーケを買くと、彼女の前にそれを差し出した。

「これも、どうぞ！」

驚き顔の後、彼女は俺の顔を思い出し、意外にも「了解！」の笑顔で言った。

「ありがとう。いただくわ」

昼下がりのバルで、水のように軽く飲めるテーブルワインをおかわりする。今日、初めて名乗りあった男と。料理を取り分けてくれる骨ばった手に、心まで掴まれそうで、思わず目を逸らす。混み合うマルシェの中で、彼はその武骨な手の中の小さな花束を差し出した。まるで、幼い子供が大好きなおもちゃを見せてくれるように。その邪気の無さに、つい心がほどけてしまった。その時、自分がタイトなドレスやメイクアップといった鎧をまとってなかったこともあるが、こんな笑顔ができる男の手の内をちょっと見てみたい気もしたのだ。

しかし彼も私も、何も見せ合うことはしなかった。まずテリトリーの端から相手を伺うように、乾杯。ワインが進んでも、プライベートについては殆ど語らず、でも何度も笑い合いながら、盛大にグラスを空けた。

彼は、南米にいた頃の話。テキーラを「トゥ・キラー」と言って、バーにいる全員に奢る。翌朝、死体のような気分で目覚めるくらいまで。実際、そうやってしまいたい事が一度あったそうだ。

でも、とにかく今は、ふたりとも健康で幸福に飲めることに感謝し、店を出た。最初のブロックで別れ、暫くして振り向くと、彼はまだそこにいた。もう一度手を振ると私は足を速めた。愛しいものを置いてきたようなせつなさに怯えたのだ。私は怖かった。ただひとりの男を想うこと。恋におちてしまうことが、とても怖かったのだ。

俺たちは「今度」とか「また」とかいう言葉を使わずに、別れた。アドレスさえ聞かず。あらためてデートの申し込みをする、そんな雰囲気ではなかった。実際、ただ楽しく昼下がりのひと時を過ごしただけなのだが、彼女からは俺が今まで愛してきた女たち・・・柔らかくて、いい香りがして、喜怒哀楽の判りやすい・・・そう、それで充分ハッピーな生きものとは違っていったのだ。何というか、All or Nothingで決断を突きつけられるような、潔さの持ち主に思えた。

「中途半端なデートをするくらいなら、ひとりでいた方がマシ。”つがい”になれないような男は近寄らないことね」

そんな壁を感じた。だからと言って俺は尻尾を巻いたわけではない。その時、情熱だけでは踏み込んではいけない、彼女の神聖な場所を尊重した、それだけだったのだ。限りなく、ジェントルな想いだけで・・・。

ところが恐ろしいもので、縁というものが・・・あるのなら・・・俺は一体どうすれば良いんだ、というシチュエーションに打ちのめされた。一昨年前、交通事故であっけなく死んだ親友の、思い出して生き返るわけじゃないが、残された者たちがやりきれない感情をチューニングするといった集まりに、彼女が来ていたのだ。

マンハッタンのバー。派手なバーテンダーにお目当てが群がるようなホットな店をあえて選んだのは、知んだあいつがかなりいいヤツ過ぎたからだ。喧騒に紛らわせなくては、その死を誰もが受け入れられないくらいに。

「今日は、クレイジーに飲もうぜ！」

急いで逝っちゃったあいつに、ハイタッチ。誰もがそんな気分だった。だけど、怯えたようなアルカイクスマイルでやって来て、話しかける人々に応える彼女は別人のように儂い女に見えた。嘘だろう・・・。

「彼女、誰？」

眉毛を上げる俺に、側にいた友達が言った。

「お前は南米にいたから知らないな。あいつ、婚約していたから」

もちろん！知っていた。選んだ女がいたことを。そして、俺は結婚式に参加するために仕事をやりくりしていたのに、結局、あいつの葬儀にさえ駆けつけることができなかったんだ。

「トゥ・キラー」・・・ふさけるな！と、ヤツの死を知った夜、ぶつけるようにその酒を浴びた・・・。

耐えられなかった。もう、皆、過去にしている。あのひとのことを過去形で話している。まだ現在進行形なのは私だけだと判っていたけれど、あらためて自分が今を生きていないことを確認しただけだった。バカみたい・・・来なければよかった・・・。でも、どんな形でも、あのひとを確認できるのならトライしてみたかった。どんな形でもいいから、あのひとに逢いたかった・・・。話しかけてくれる友人たち、あのひとを愛してくれているのは理解できるけど、どうしても心を保つことができなくなり店を出た。いつも泣いてしまう、この場所に来てしまった。冷たい大理石に刻まれた、あのひとの名前。撫でると、あのひとの不器用な指が私の背中をこれ以上なく繊細に滑っていった日を思い出す。

「あんたは、あいつの・・・」

誰かが後ろに立っていた。決して見られたくない涙。それが、あの4月の午後のバーで声をかけてきた、あの男だと知った瞬間・・・しかも、ほんの少しでも心が動いた男の・・・激しい怒りで身体が震えた。彼の頬を打つために振り上げた手を掴むと、彼はいきなり私を強く抱きしめた。

「あんたが、あいつの・・・」

唇が触れてしまいそうな距離。だけど、彼はくちづけることをしなかった。そして、その瞳が果てしない哀しみに満ちていることにやっと気づいたのは、彼の「こいつは、ガキの頃からの親友なんだよ」という絞り出すような言葉だった。

瞬間、腕の中の、彼女の怒りで輝く目に見とれていた。まるで爆発寸前の火薬の匂い……。たまた、もう一度彼女を抱きしめようとする、激しくもがいて叫んだ。

「やめて！恋なんてもうたくさん！わかるでしょ！？もう、ごめんなのよ……」

俺は、この手負いの獣を逃がそうとは思わなかった。そして、この生き物に小細工なんて効かない。俺は、覚悟を決めたんだ。いみじくも大親友の墓の前での告白なんて！

「恋じゃない。うまく言えないけど、マジなんだ！あんたは逃げてる。いつまでウイドウでいるつもりなんだ。人生から隠れてるなんて……あいつは何て思うか」

激しく頬を打たれた。……いいんだ、それで。それから、もう一度彼女の両手で包み、はじめてのキスをした。

「残念だな……これからは俺が続けるぜ」

こんな女を遺して早々に逝っちまった、せっかちなあいつにウインクすると、ヤツは天国からウインクを返してきやがった。

「頼むよ。言うておくけど、彼女、相当、取扱い注意だぜ！」

まるで生まれ変わったような、彼女のおしゃべりな唇は俺に囁き続けている。

「さあ、私は心をハダカにしたわ。で、あなたはどうかの？」

もちろんさ！俺は唇を離さずに彼女を抱き上げ、セメタリーでワルツのステップを踏み始めたんだ。

Fin♪

## 愛しいひと

---

氷に浮かぶシャンパンのボトルが揺れて、音を立てた。その音で、その高価な酒であるコルドン・ルージュがひとりの女に所属していることを確認した。

安らかな眠りのための、一杯のナイトキャップ。ふらりと入った初めての店だったが、ガラス越しにリタイアしたかつての軍人たちが楽しそうに飲んでいる様子を見ていたので、気軽な居酒屋のように覗いてみたいと思っていたのだ。

そのボトルを独り占めしているのは、まるで雨宿りにやって来たような女。確か、雨は降っていないよな・・・窓の外を確かめてみたくなる、水の雫を湛えたひとに見えた。

「hey...you...もう、いいかしら」

彼女は微笑みながら俺の方に身体を向き変えた。知らず知らずのうちに、そのひとを凝視していたことに気づく。慌てる俺に、彼女は小さくウインクして言った。

「very...expensive」

わたしの値段はとっても高いのよ・・・！？Oh,No! フッカーだったのか。驚きと落胆の表情を隠さなかった俺を見て、彼女は喉を反らせて笑った。

「冗談よ、ごめんなさい。・・・嫌でなければ、少し、手伝って」

シャンパンボトルをつかんだ指先は、ネイルもしていない短い爪。そういえば服だってシンプルなスーツ。こんなひとが娼婦の訳がない。俺は自分の拙さに顔が熱くなった。

そのひとの名は、クレア。彼女は俺をデイヴィッドやデイヴと呼ぶ他に「hey you」という言葉を使った。そして、そのたった6文字のアルファベットは、その時々とても饒舌に彼女の想いを俺に伝えた。例えば「ね、あなた」だったり、「いけないひとね」だったり、「・・・来て」だったり。いつも違うニュアンスを持つ、その呼びかけをもっと聞きたくて、俺はふいに彼女をきつく抱きしめる。いつかは遊びに行ったビーチで彼女を抱き上げ、波に向かって全速力で走ったこともあった。

「バカね！やめて！」

でも俺は、彼女のhey youを聴くまでは止めなかった。ふたりとも波に巻かれて、砂で擦り傷を作って、それでも笑い合ったあの日。犬みたいに飛沫を撒き散らす俺の頬を包んだ温かな手のひら。優しく走る、彼女の目尻の笑いジワが愛しくて、思わず俺は泣いてしまいそうになった。

いつしか俺の部屋のあちこちに彼女の持ち物が増え・・・シームレスのストッキング、デンタルフロス、洗面台のガラスのボトル、それから俺の飼い猫のために買ってくれたおもちゃやジャーキー・・・柔らかな生活感が俺をほっとさせてくれた。毎日、俺は朝別れたばかりの彼女に逢いたくて、息を弾ませて階段を駆け上った。そんな俺の帰りを彼女も奇跡だと言わんばかりに迎えてくれた。ありふれた日々の奇跡、本当にそれは儂い奇跡に支えられていたものだった。

ある休日の昼下がりに、冷たいビールをやりふたりで入ったパブで、ひとりの男が帰りかけ、彼女の耳元で囁いて行った。

「よう、ゴージャス。久しぶりだな。また頼むぜ」

その言葉が聞こえなかったとしても、そいつの下卑た表情で何を言ったのかがはっきり判った。俺はそいつを殴るために立ち上がったが、そのまま動くことができなかった。クレア・・・

おまえは・・・。血の毛を失った白い顔を俺に向ける。嘘だと、人違いだと言ってくれ。しかし、彼女は絶望し、頭を抱え、髪を乱した。俺は、そんな彼女を置いて店を飛び出した。

あの、俺ひとりだと思わせるようなため息や指先は、彼女の商売道具！？金を払えばレンタルしてくれるものだった

。俺は彼女を憎んだ。そして、まるでイカレていた自分自身をそれ以上に激しく憎んだ。

彼女のいなくなった空間。あの、hey youと呼ばれることのない毎日がこんなにも俺にダメージを与えるなんて、予想もつかなかった。何度か女とも寝たけれど・・・もちろんメイクラブではなく、ファックのように潔いものでもない、寂寥感を募らせるための行為でしかなかった。

そんなある日、一通の手紙が届いた。差出人は・・・クリア。ていねいに書かれ文字がせつなくて、俺はスコッチをストレートで煽ってからでないと最後まで目を通すことができなかった。

「信愛なるデイヴィッド

あなたに嘘をついていたこと、やっと謝ることができて、少しほっとしています。ごめんなさい。とても愚かな嘘です。許さなくていいのよ。

初めてあなたに逢った時に、私は恋におちていました。これまでの人生をなかつたことにしたい、と真剣に思うくらい。でも、やはり、そんなのは長続きしませんね。だけど、あなたと過ごした日々は、私の人生の中でいちばん美しい時間でした。そんな時を私に授けてくれたこと、心から感謝しています。

あなたの人生が愛に満ちたものでありますように、祈っています。

クレ

ア  
P.S.タイガーのお気に入りのごはんのこと、キッチンにメモで留めてあります。」

相棒の猫、タイガーがチラと横目で俺を見ていた。何やってるんだよ・・・とでも言いたげに。

俺は彼女を探した。あらゆる伝手を使って。やっと掴んだのが半年後。一度だけ紹介されたことのある彼女の叔母さんに何度も何度も頼み込んで、俺の真剣さを判ってもらったようだ。二度とあの娘を哀しませないで、という言葉とともに教えてくれたのは、彼女が今働いているニュージャージーのカフェの住所。

そこは海岸に面した、地元の口コ達で賑わう気取らない店だった。夕方からの客を迎える準備をしている人気のない時間。店のドアを開けた俺が逆光だったため、彼女はしばらく眩しそうに俺を見ていた。ためらわずに彼女の側へ進む。この半年以上、この女のことだけを求めていた。

「・・・デイヴィッド！？・・・いけない」

俺は逃げ出そうとする彼女をなだめるように椅子に座らせた。

「帰ってちょうだい、お願いよ」

苦しげに眼を閉じる彼女の手を取り、俺は床に跪いた。

「わかってる。君はエクスペンシヴなんかじゃない。プライスレスだ。君のすべてを愛するよ。クリア・・・Will you marry me？」

ひと言、イエスと言ってくれ！彼女は返事をする代わりに、その濡れた瞳から一粒、真珠が転がるように涙が頬を滑り、ふたり重ねた手の上で弾けた。それが合図のように、次々と零れ落ちる真珠たち。俺は、女の涙がこんなにも美しいものだったのか、とバカみたいに感動していた。

俺たちはここから始めるために出逢ったんだ。hey you・・・そうだろ？

fin. ♪